

火星

平成二十三年一月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

大銀杏寄れとばかりに枯れにけり

鯉揚げに朝月のうく寒さかな

枯るる中鯉揚げの貌ふりむきぬ

浚へある池へ突き出て弁財天

池浚ひしあとの日数の歩み板

屏風絵は内蔵助なり遊びをり

炭斗にひろうてありし冬椿

枯山を独りたのしむふたりかな

鶉のとびかひに池涸れゆけり

数へ日の雀こぼるる天龍寺

第十四回 火星賞

蘭 定 かず子

平成二十二年度の火星賞を右の通り決定
致しました。

平成二十三年一月

火星俳句会主宰

山尾 玉藻

推薦の言葉

キャンパスの道噴水に集まれり
波寄するたび夏蝶の眩みけり
片はづしのマスクに沖の座礁船
即物写生句がぐいぐいと読み手に迫り、描写される景以上のものが胸深く刻まれる。かず子さんの写生句には景を立体的に立ち上げる静かなパワーが漲っている。

木菟鳴くや寸胴鍋に水張られ
紅梅へゆく虫柱はらひけり
「木菟」と「寸胴」、「紅梅」と「虫柱」、関わりない二物が不思議に照応し、実景のその奥の何かを語りかけてくる。かず子さんには物事の本意を見定める沈静な観察眼と、詩の在り所を知る感性が具わっている。

水平に七草籠を受けとりぬ
糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ
狛犬に秋の日傘の落ち合へる
作家として佳きところの色を持ちあわせておられるが、それを誇示するどころか常に寡黙を通す。この潔い姿勢は俳句そのものである。

神棚を上げ築番の日数かな
合戦図あふぐ色なき風の中
往来にこゑ聞きに出る秋の暮

ごく最近に発表されたこれらは、余計な言葉を差し挟む余地のない珠の如き作品である。しかし誤解を承知で言うなら、これらの句から骨法を弁えた巧みさが感じられなくもない。高悟帰俗という言葉がある。今後かず子さんが一層自由無碍な句境となられる事をこころより願っている。

かず子さん、火星賞ご受賞本当におめでとうございます。

太白星

柳生千枝子

だみ声の老農が来て秋旱
木の実しかと握り幼手の湿り
澄む水に屈みてをりぬ転校生
夢寐に入るいつもの虫が鳴いてをり
霧こめてくる髪すこし重くなる
月全し誰かハモニカ吹いてをり
眩きを聞かれてしまふ曼珠沙華

杉浦典子

羽音の帰りし山に月上る
落鮎の川の辺に火を熾したる

落鮎の腸に炭火のぬくみあり
落鮎のまひるの水の昏みたる
紅葉山明るきうちに着きにけり
蹴上までくつついてきしむのこづち
紅葉散る音楼上に聞きぬたり

浜口高子

自然薯と男が穴を出で来たり
自然薯の長脛彦を抱きかかへ
自然薯摺るほどに露な膝頭
島めぐるバスに猿柿弾かるる
また落ちし榎櫃の貌のひとつつ
美男かづら蹴上の昼を熟れゆけり
冬の来る韻にみかへり在す弥陀

火星作品

山尾玉藻選

それからの月の衰ふ蔓たぐり
宝塚蘭定かず子
文旦にみじかく上がる島の雨
往來にこゑ聞きに出る秋の暮
あをぞらの午後はうする威銃
綿虫に水道橋の柱あり
明石戸栗末廣
田を刈つて戻りやすき水の音
暮れがたの金木犀に雀入る
月光に貌もたげをり鴟の贄
水溜りに今朝の空あり運動会
松手入終へたる皇居前の空
紙袋のぴんと張つたる今年米
宝塚山本耀子
月の出や笹より湯気の立ちのぼり
どの軒も菊の鉢ある粟田口

水慣れ棹野菊の岸を一突きす
 鶏頭の種を受くるに懐紙出し
 鴟鳴いて水の匂ひの宇陀郡
 蜘蛛の囿の真なか細しき野分晴
 みづうみの晴にさしあり鴟の贅
 顔じゆうに日の差しぬたり角伐会
 鳥立ちて日向よごせりお茶の花
 松手入掘抜き井戸に銅あかの蓋
 九品寺や括らぬ萩の垣に沿ひ
 印南野や溜め池百に月渡り
 男山にしりへのありし十三夜
 草の花ごつたに吹かる粟田口
 鬼嶽に雪をいたたく大旦
 お降りの水輪つぎつぎ生れけり
 まう少し元気で居たしごまめ噛む
 丹後から京へ上りぬ絵双六
 またひとり去んでしまひし手毬唄
 大和郡山城 孝子
 神戸深澤 鱈
 京都白敷康弘

選のあとに

山尾 玉藻

率直な表現による描写で印象鮮明な一句と成った。

鳥立ちて日向よごせりお茶の花 城 孝子

それから月の衰ふ蔓たぐり 蘭定かず子

畑や野で枯蔓をたぐると、辺りの枯草や枯葎がかさこそと音を立てて揺れ動き、蕭条とした晩秋の思いを深くする。作者もそんな感慨で少し欠け始めた月を仰ぎ見ているのだろう。一見閑わりのなさそうな二物を巧まざる言葉でつなぎ、ひとつの真理を生んだ。冒頭の「それからのは巧み。」

暮れがたの金木犀に雀入る 戸栗 末廣

夕暮どき、「雀」の黒っぽい影が「金木犀」に飛び入ったと思つた瞬間、金木犀の小さな花がほろほろと零れ、花の香が一層芳しく辺りに漂つたのだろう。しかし掲句、そんなことには何も触れていない。季語の本意をしっかりと踏まえ、あとは放り出す他方本願。これこそ俳句。

紙袋のぴんと張つたる今年米 山本 耀子

「新米」が厨口に届いたのだろう。「紙袋のぴんと張つたる」の天真爛漫な描写から、新米に対する作者のこころ踊りが感得でき、紙袋に漲る新米の生氣のようなものも伝わってくる。

〈茶の花の傍にしばらくあたたまる 差知子〉があるように、本来目立たない「茶の花」が初冬の日を浴びている様子は楚々として穏やかである。茶の花の近くにいた鳥がたまたま飛び立ったようだ。その瞬間、騒がしい羽音が辺りの静穏を乱し、安らかな冬日が掻き混ぜられたように感じた作者である。この一瞬の感応である「日向よごせり」に大いに共感する。石田波郷の言う打坐即刻の一句。

男山にしりへのありし十三夜 深澤 鱧

冷やかな月明に浮かぶ「男山」は実に由々しき景であつたろう。しかし作者は、山容を目の当たりにしつつ見えない山の裏側にこころを遣っている。澄み透つた「十三夜」の冷気が作者を一層ナイーブにしたようだ。静謐な浪漫。

またひとり去んでしまひし手毬唄 白数 康弘

作者は先ほどより手毬で遊ぶ子供たちの唄声に耳を傾けている。しかしそのうち、一人、また一人と帰っていく声があり、「手毬唄」の声もひっそりとしてきたのだろう。それが少し気がかりな作者である。

(以下略)

恒星圈

飯塚 糸子

けさ秋の野づら明りの讃岐富士
秋雷の伊勢の活魚屋台かな
中陰の肴に添へる黄菊かな
抛りをくベッドの下の木の実独楽
蓑虫に膝をくづさぬ石佛

伊勢きみこ

采女社に祝詞のあがる良夜かな
注連を巻く杉の幾本天高し
ビニールの四手たれてをり草の花
はらからとつかる出で湯やすいつちよん
秋日濃し児のあいさつの韓国語

再会の卓に大きな黒葡萄
無花果や夕日落ちゆく雲の中
ことほぎのけふもみいづる東山
鶉高音首切地蔵で引き返す
遠く来て鴨鍋食うて眠られず

垣岡 暎子

小刀でまゆずみ削る居待月
定年のにはか覚えの松手入
いい加減のうまくゆきけりとろろ汁
ふりむかず手を上げゆけり月の道
曼珠沙華とびとびに白曼珠沙華

加古みちよ

どんぐりを拾へば乗せて三輪車
十月や朝顔の種太りつつ
なぐさめは鳥瓜一つにて足れり
日暮れても遊んでゐたき鳥瓜
どんぐりにそれぞれの顔ありにけり

獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

月の座の泣き出しさうな赤子かな
秋空の広がってゐる会議室
茸山の口に停めあるスポーツカー
秋草の揺れの移れる体かな

川端俊雄

厨子の扉を開き月待つ吉祥天
紅葉の始まる枝の蝸牛
人さがしゐる北山の時雨かな
露けしや鐘は西より東より

奥田順子

橘は棘もつ時代祭かな
六曜や門扉の裏の鉦叩
白粉花やすでに三七日すませしと
秋水を打ちて色鯉それつきり

竹内水穂

コスモスの向き定まらぬまま籠に
子供らの種子とる遊び草もみぢ
時の鐘小僧が鳴らし秋深む
霧晴れて穂高連峯見えて来し

田中文治

割箸にほのかなぬくみとろろ汁
白蝶の止まることなき曼珠沙華
夕暮の風のうすらぐ威銃
櫛とれば色鳥窓に来てをりぬ

西村節子

深吉野の霧に籠れり鹿の声
並び座す仏の膝や萩の風
冬近し女待ちちゐる楽屋口
トンネルに疏水失せけりななかまど

井上淳子

田の水は川にもどりし野菊晴
母の恋初めて聞きぬ烏瓜
落鮎の丸きお腹を見てしまふ
軒先の干柿ごしに返事あり